

私にも
言わせて!
第22回

公衆衛生医を選択した 自分を振り返って

昨年度、勤務医を経て公衆衛生の分野に移ってからは、「なぜ公衆衛生に」という質問を何度か受けてきました。「先輩の先生方が活躍しておられるから」「母子保健に興味があったから」など、いろんな答え方をしていたように思います。

なぜ公衆衛生を選んだのか

私は医師になって小児科に進みました。「日が昇るように、子どもには発達があり未来がある」。これが決め手だったように思います。勤務医当時は、深夜の救急外来がいやでいやでしたがないときもありました。でも、お子さんのことが心配で受診されたお母さんやお父さんが、診察や処方で安心してくださったり、点滴を始めたお子さんが少しでも休むことができているのを確認できたりすると、「ああ、よかった」と感じて、救急外来が終わるころには充実感がありました。病院では腎疾患の患者

さんたちを担当していました。腎不全に至らないようにどのよう治療薬を組み合わせて戦略を立てていくか、それでも腎不全に至ってしまった場合には、いかに合併症を少なくして腎移植へつなげていくか、を考えたが診療していません。同じく腎疾患を担当されていた先生が尊敬できる先生であつたから続けてこられた部分も大きかったです。

でもあるときから「患者さんが出していたであろうサインに自分が気づかずに取り返しのつかないことになってしまったのではないかと感じる症例が多くなりました」。なぜ気づいてあげられなかったのか「疲れていたからか」なぜ

頑張らなかつたのか「患者さんより自分を優先したのではないかと。命と向き合う尊厳と怖さ。私はその怖さの中に逃げてしまっていたのだと思います。

子どもは本当に強く、優しく、だれもが光の中にいます。元気なときは一緒に笑って、きついときは寄り添って、そうやって一人ひとりの光を大切に出来て来ましたが、いける小児科が私は大好きです。でも、このまま続けたら、私は自分が医師になったことを後悔してしまうのではないかと感じました。そう感じたときに自分の前に示された選択肢のひとつが「公衆衛生」という分野でした。

小児科医から公衆衛生の入り口へ

公衆衛生は、海外の国と比べるとその重要性がまだ十分認識されているとは言えませんが、とても

が重要です。臨床で保護者の方に説明するときと違って、この「わかりやすく話す」ということが意外と難しく、しっかりと勉強していかないとならぬという意識が学ばれました。国内はどうか、海外ではどうか、そういう視点で意識して感染症をみるようになったことも県庁に来てからのことです。

感染症が集団発生したときや結核患者さんが見つかったときに、蔓延防止のために動いているのが保健所だということ知り、保健所への見方がこれまでと変わりました。この蔓延防止がいかに大変で大切な、臨床においてはわからなかったことです。また、県庁に来て初めて報道機関の方々と接するようになりまし。最初は慣れなくて答えるときもどこか身構えて

いましたが、しだいに、報道の方々はよりよい情報を広げたいとされているのだと感じて、何でも話してしまいたくなりました。

目の前のヒューマン

いままで知らなかつた世界

とに、とても感謝しています。

公衆衛生の現場では

3か月間の研修が終わって県庁に戻ったあとは、感染症全般、肝炎対策、結核対策、予防接種事業、新型インフルエンザ対策、食品衛生、幅広く見ることになりました。行政の仕事の進め方は自分にとって戸惑うばかりで、気づかないうちに周りの方々に負担をかけてしまつたり、ミスをしつたりと、挙げたらきりがありませんが、本当

に支えていただいていたんですよとずっ慣れてきたかな、というところ

全体を通して感じているのは、物事の方向性を決めたり、問題に対処するとき、さまざまな職種の方々が個々の経験や立場を生かしながら考えて意見を述べ、皆で結論を出していく、ということ。臨床では自分一人で考え、責任をもち行動する場面が多かつたので新鮮でした。勉強になったことのひとつは、たとえば感染症に關しては、医療関係者同士だと経験でものを言つたり、お互いなんとなく理解できる部分もありますが、行政の現場においては医療現場を経験されていない方にも話を通すには、しっかりとしたデータに基づいてわかりやすく話すること



研修の風景



研修生の皆さんと作った七夕飾り



熊本県健康福祉部
健康危機管理課 主幹
服部 希世子

熊本県生まれ。平成11年佐賀医科大学卒業。同年、熊本大学医学部附属病院小児科入局。平成25年4月熊本県に入庁し現職。

大切な分野であること、これまでの経験が生かせる場所だということを感じました。また図書館で公衆衛生に関する本を読んだりもした。しかし進路を選択する段階でも、正直自分がどうかかわっていいのか想像ができていませんでした。病院を辞めて県庁に入ったあと、国立保健医療科学院で3か月間にわたる公衆衛生の研修を受けることになりました。保健所が何をしているのか知らなかつた私にとって、研修では初めて聞く言葉や知識も多く、「私は受け入れることができるだろうか」「やっていけるだろうか」と講義のたびに感じていました。でも、同じ研修を受けていた方々のお陰で、研修が終わるころには公衆衛生の雰囲気何となく理解でき、「やっていけるかも」と感じました。研修が終わつたあとでも自分の支えになつてくださる仲間に出会えたこ

を見て経験している一方で、気を抜くと、自分がどこに立っているのかわからず見失つてしまつたり、違う形で臨床を続けていけばよかつたかな、と感じたりすることがあります。こういう弱い自分が出てくるのは、公衆衛生で何をしたいのか、自分の中ではつきりもつていないのも原因のひとつだと感じています。

大学を卒業して研修医になったころは、何が何だかわからず、目の前の患者さんに向かい、ただ一生懸命に過ごしていました。そうやって、多くの経験を積んでいくなかで楽しいことやうれしいこと、悲しいこと、辛いことを感じたり、また出会つた先生方や、患者さん一人ひとりが自分を小児科医にしてくださつたと思つています。いまの自分にとっては、あせつて目標をつくらうとするよりも、研修医のころのように、「目の前の自分の仕事にひとつずつ取り組んでいけば、いつかその先に見えるてくる景色があるのかな、公衆衛生医と言えるようになるのかな」と思っています。